第4回「学生とまちづくり・シンポ：高齢者の理想郷・南地区」

人間関係学科教授
篠　藤　明　徳（編）

別府大学文学部人間関係学科と地域社会研究センターは、昨年度に引き続き１月31日、別府市の中心市街地にある竹瓦温泉２階で第４回「学生とまちづくり・シンポジウム」を開催した。今年度のテーマは「高齢者の理想郷・南地区」。高齢化の進む南地区に焦点を当て、この地区に「高齢者の理想郷」を作ろうという内容である。高齢化の問題は日本全体の課題だが、南地区に高齢者が住みやすい環境を整えることによって、都会から移住してくる人々を増やすことで「新しいまちづくり」の可能性を探ることを目的としている。一般市民やマスコミ関係者も参加し、活発な議論が展開された。

さて、このシンポジウムは「地域社会学」の一環として実施され、人間関係学科の教育目標である「地域社会を担える人材育成」のため、１年生の導入授業と位置づけられている。昨年までの２年間については既に「地域社会研究」で２回報告している。この３年間のテーマは、意図的に町の課題を深化する方向で計画してきた。つまり、中心市街地の活性化という問題設定において、1年目は商店街、飲食店や通行人調査など主に商業の活性化に重点を置いてきた。その結果、住民の視点をもっと取り入れるべきだ、市全体の政策との関連はという課題が浮き彫りにされ、２年目は住民、地域づくりグループの調査、市議会議員への取材を展開した。そして、３年目は、その中の特定地区（南地区）に絞り、高齢者の理想郷という将来的展望の可能性を考えた。この授業が地域で注目を集めた理由は、こうしたテーマ展開にもあったと思われる。今回参加した市民の一人が、大学が３年間もテーマを深化させる形で一定地域に関わり、住民との関係と作ってきた事に感銘した、と語ったことが象徴的であった。

本稿では、まず、第４回シンポジウムでの４つの学生の発表を報告し、その後、中心市街地を舞台にした３年間の教育活動の理念や成果について総括したい。

Ⅰ　南地区老人会アンケートの結果

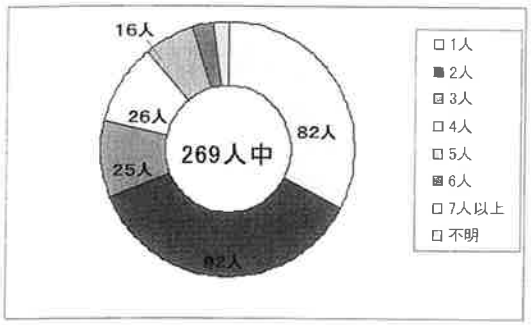
［担当学生］
工藤早苗、出口貴雅、久保加奈子、呉先美、董国禎

南地区の11の老人会にアンケートを依頼し、269名に回答を頂いた。老人会では70代～80代の方々が中心に活動され、60代はまだ現役で活躍されている方が多いせいか所属率が低い。しかし、そのことを差し引いてもこれから南地区はさらに高齢化が進むことが予想される。

約90パーセントもの方々が21年以上、あるいは、生まれてからずっと南地区に住んでいる、という。また、一人で生活している人が82人、二人で生活している人が92人だった。表を見てもわかるように、１人、または２人で生活している人が半数以上を占め、老人のみで生活している場合が非常に多い。

ほとんどの回答者が生きがい、趣味を持って

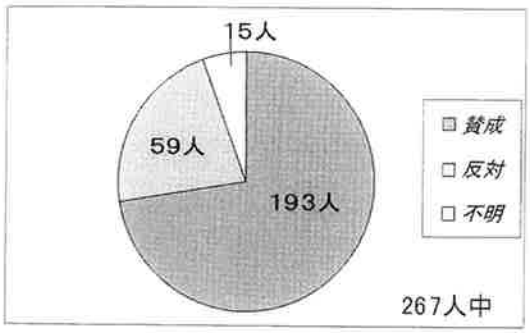
何人で生活をしているか



いると答え、具体的には旅行、散歩、老人会の活動などが多く、余生を存分に楽しんでいる様子が伺える。少数意見だが、筋トレなどの体力づくりをしている若々しい人もいた。

次に、人々の転入を望みますか、という質問に対し、4分の3以上が移住者の転入に賛成という結果が出た。その背景には人口減少への不安があるようだ。新しい人との交流ができる。友達が増えるなど、積極的な意見が多く、特に若者の転入を望む声が多かった。しかし、反対意見として、

人々の転入を望むか？



地域に溶け込まないのではないか、町内の付き合いを好まないのでは、という声もある。

また、福祉サービスが必要だと思うかどうか、という質問に対しては、南地区にもっと福祉サービスが必要だいう回答が多い。具体的な福祉サービスとして、配食サービス、ホームヘルプサービス、デイサービス、訪問美容室などの意見のほかに、老人憩いの家などを望む声が多数あった。理由としては、老化によって必要になる、が最も多く、次に一人暮らしのお年寄りのため、楽しい時間をすごすため、食事が偏りがちになるから等があがった。

南地区にどのような施設、店があったらよいか、という質問では、スーパー、公園、運動施設があがった。このような場所を望んでいる理由としては買い物する場所は近いほうがよい、対話の場になるから、健康管理・生活に便利だから、生活面での安心感などである。

共同温泉の利用頻度では、一週間のうち一度も入らない人と毎日入る人に大きく分かれるという意外な結果になった。また、利用されている共同温泉は、日の出温泉（41）、永石温泉（26）、浜脇温泉（25）、不老泉（16）の順であった。

身近な医療機関に関する質問では、特にできてほしい医療機関はあまりなかったが、循環器科、総合病院が足りないという意見があった。南地区の魅力について聞いたところ、交通機関、医療機関、温泉等が近くにあり便利だという意見が多かった。また、長年暮らしているので隣近所の方たちと仲がよく、暮らしやすいという声も目立った。

また、不満、不安等を質問したところ、特にない、満足しているという声が目立った。しかし、老人ばかりで静か過ぎる、活気のある、にぎやかな街に戻ってほしいという意見も多かった。少し心配なのが、交番が移転した後にガラスを破って侵入し、盗みを働く悪質な犯罪があるらしく、不安の声があったことだ。

以上アンケートの結果を見ると、初め南地区は住みづらそうに見えたが、南地区に住む高齢者は快適に暮らしていることがわかった。温泉の町だけあって温泉の利用頻度が高かったことも印象的だった。また、一人暮らしの方や老夫婦の2人暮らしの人が多く、介護サービスの必要性を感じた。高齢者にとってよりよい環境を作り、快適な老後生活を過ごせるためのまちづくりが大切だと思った。

II 福祉から見た南地区

［担当学生］
入野寿士、岩見有恭、衛藤加奈、木村友香、
吉良都広、小原　威、堀川尚輝

南地区は、別府の古い地域で比較的医療機関

が多くある。しかし、路地が多く、病院等の位置もわかりにくい時がある。また、道路が狭い上に路上駐車も多く、高齢者が生活するには改善すべきことも多々あるようだ。そこで、私たちのグループは、福祉の視点から南地区で必要と思われることを互いに議論し考えてみた。

まず、地域で生活するための交通問題として、高齢者の方が移動する際に利用されるコミュニティ・バスを考えたい。コミュニティ・バスとは、一般の交通機関が不便な地域で運行され、主に高齢者や障害者のモビリティを確保するために行うものである。中心市街地の活性化になり、環境負荷が軽減される。運賃も安いので高齢者の外出が増え、寝たきりの防止等の効果も期待される。また、バスが非現実的であれば、福祉タクシーなどの制度はどうだろうか。タクシーで行きたい場所に高齢者の方を送り、希望があれば運転手やボランティアの人が買い物などに同行でき、家まで送り届ける等も可能になる。

次に、高齢者の方がふれあいを増やすためには、小学校などで交流会を開き、今の子供が知らない、昔の技術や遊びなどを教えることもできる。温泉の2階にある公民館をふれあいの場として使用するのがよいだろう。

また、独居老人のための食事配達では、別府大学の食物栄養学科などの協力で、専用の車を配備し実施することも考えられる。その場合、配食をする学生が、高齢者の話し相手になることもできるのではないか。また、下ごしらえした食材を家庭に届ける宅配システムもできるだろう。材料や時間、そして食費の無駄を徹底して省いた夕食宅配システムや高齢者向けの夕食弁当も良い。500kcalを基準にし、月曜日から金曜日の５食で1,980円という計算もあり、その場合、１食395円となり利用しやすくなる。

今日、パソコンの普及は目覚しい。そこで、高齢者対象のパソコン、携帯電話教室を開催。メールで食事配達、タクシー、バスの予約などができるようにする。地域のイベントを知らせるメールをいっせいに送信こともできる。これにより、なかなか外から情報を得ることのできない高齢者には便利になる。情報提供により外の出る機会が増える。

南地区で交流や福祉タクシー等の拠点として考えられるのは、松原市営住宅１階部分があると私たちのグループは考えた。この地区の商店街・楠銀天街は、ほかのグループでも指摘されるとおり、空き店舗が多く、日中も暗い感じで、町全体の魅力を損なっている。この空き店舗の活用も重要である。しかし、その商店街と松原公園の間にある松原市営住宅の１階部分が空き状態になっている。だから、ここに、高齢者のための配食センター、コンピュータ教室、福祉タクシーの事務所等を集積させ、ひとつのセンターにしてはどうかと考えたわけである。

III 住環境の設備ーユニバーサルデザインのまちづくり

［担当学生］
秦　仁美、大塚巧人、上野　翼、中嶋幸平、清松清子、江原博子、喜々津彩、帆足京子、吉良智之

私たちのグループでは、高齢者が快適に生活できる環境作りということで、最近よく言われているユニバーサルデザインを中心に南地区を考えてみた。ユニバーサルデザインとは、特殊な仕様を施すことなく誰もが使いやすい製品や環境をデザインすることであり、住宅市場では、安全、便利、活動的で、かつ多様なライフスタイルのためにデザインされた住宅を意味する。交通面では、誰もが、自由に、好きな場所へ移動できるようにすることと定義されている。南地区を見ると、古い建物が多く、安全で便利とはとてもいえない。そこでユニバーサルデザインを取り込めば、今より更に豊かで楽しい生活を送ることができるだろう。

この発表では、海外の事例や日本の先進地での具体例を主に紹介する。

ユニバーサルデザインの住宅

アメリカでのユニバーサルデザイン住宅は、段差のない広々とした玄関や間口を備えている。ユニバーサルな仕様は、使い勝手を考え変更を加え、既存の設備や製品を選択することもできる。この他にも、家の全てのドアには誰もが使いやすいレバーハンドルが採用されている。平坦なフロアのバスルームには、壁紙やバスタブ後部と一体化した腰掛があり、低い位置にカランがある。また、可動式のキャビネットでバスルームとトイレを隔て、車椅子での利用が可能となった。

一方、日本の昔ながらの家は、玄関はかなりの段差があり、荷物が多いときや車椅子の人が利用するときは出入りに苦労する。浴槽は位置が高く、子供やお年寄りには少々危険を伴うこともある。トイレは最近では洋式が主流だが、とても狭く車椅子での利用は難しい。ドアは、荷物で手がふさがっているときや力の弱い子供やお年寄りには、レバーハンドルがよいだろう。

アメリカのユニバーサルデザインの住宅

ユニバーサルタクシー

1992年12月、車体にUNI-NETの文字が鮮やかな、ユニバーサルデザインのコンセプトで作られたタクシーが、横浜、静岡、神戸、長崎の４都市で走りはじめた。車体は日産ＲＶの最上級車「エルグランド」をベースにして、リフトをつけるなど改良を重ねたものだ。このタクシーは、従来からある福祉タクシーとは異なり、全ての人が普通のタクシーと同様に、同じ料金で利用することができる。地方のタクシー事業者にとっては、全国で統一規格化されたユニバーサルタクシーは、地方企業から脱皮して、全国ブランドがもてるなどの利点がある。利用者の側にとっても、旅先などで馴染みのあるタクシーを統一料金で利用できるので安心だ。ドライバーにも、運転が楽で疲労が少ない、社会貢献による満足感や顧客との人間関係などで営業にやりがいが出てくると好評である。こうしたユニバーサルタクシーが別府の町にも走るようになると良いだろう。

路面電車の活用

ドイツ南部のライン川沿いに位置するフライブルク市は、排気ガス、駐車場不足、騒音対策として路面電車を軸とした交通システムを導入しており、中心市街地の交通手段は自転車、歩行者、そして路面電車が中心となっている。市民は路面電車の末端駅にあるパーク・アンド・ライド用の駐車場に自動車を置いて、路面電車に乗り換えて中心市街地に入ってくる。中心市街地に自動車を駐車できるのは住民だけで全て許可制だ。路面電車の料金は、自動車の諸経費より高いと利用されないので、非常に安く設定されている。1998年における路面電車の利用者は１日約23万人、ドイツ鉄道を含む鉄道路線、路面電車路線、バス路線の約90路線、延長距離2,900キロの公共交通機関を利用できる定期券は、大人料金で月額66マルク、日本円で約4,000円と破格の値段である。なぜここまで安くできたのかというと、市などから補助が出ているためで、大分駅から別府大学駅までの定期が月額7,750円なので、この安さが良く分かる。

トランジットモール

トランジットモールとは、歩行者専用のモールまたはショッピングモールに路面電車などの公共交通を導入した都心商業空間のことである。路面電車などの公共交通が水平に動くエレベーターの

役割を果たしている。1部バスも走行しているが、基本的には車両の乗り入れは禁止で路面電車と自転車だけが許されている。トランジットモールを導入する際、商店主達は商売が上手く行かなくなると言って反対したようだが、導入後は賑いが戻ったために誰も反対しなくなったという。

今回の発表では、アメリカのユニバーサルデザインやドイツでの路面電車の活用例を報告した。南地区の住環境整備を考えた場合、こうした先進的アイディアを取り入れ、日本の中でも傑出する地区を作るぐらいの気持ちが必要なのではないか。こうしたアイディアを南地区の構想として具体化することは今後私たちがさらに考えていかなければならない課題である。

Ⅳ 移住者による起業の可能性

［担当学生］
工藤早由、久保加奈子、黒蕨あずさ、
本田知里、川口泰督、田中良治、富安大輔、
呉先美、亀本尚未、後藤優輔、董国禎、
出口貴雅

別府は全国一の温泉地ではあるが、大半は坂の町で、フラットな場所が少ない。そのため、交通の便利が良く、平坦な南地区は、都会の高齢者の移り住む可能性のある、別府では数少ない場所である。そこで、私たちグループは、別府の中心市街地に都会から高齢者が移住するという仮定に基づき、移住による起業の可能性を検討した。

まず、南地区にある楠銀天街の活性化と起業の可能性とを関連できないか探る為、現地調査をおこなった。楠銀天街は入り口付近が暗く、その存在が分かりにくい。店舗の光が届く範囲のみが明るいだけで全体的に薄暗い状態となっている。

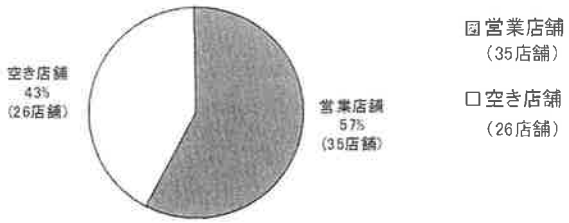
それでも商店街の方によると、地元の住民の生活道路となっており、高齢者の散歩コースとなっているそうだ。また、小学生の通学路として使われ、調査の日も下校時間には子供達が通行していた。総店舗数61店舗中、営業店舗35件、空き店舗26件、比率で表すと57％の店舗が営業している。青果店の営業店舗数が多く目に付いた。一軒の青果店の方に話を聞くと、「野菜や果物などは、安ければわざわざ遠くの店にまで買いに行かないし、毎日消費するものだからね」と答えた。楠銀天街を過ぎたところに松原公園があるが、子供達のたまり場となっているようで、この日も子供達が集まり、また、多くの高齢者の姿も見られた。

まちづくりの仕掛け人・野上泰生さんに聞く

次に私たちは、竹瓦倶楽部に所属する、野上本館の野上泰生さんに話を聞いた。野上さんは、別府中心市街地のまちづくりに熱心に取り組まれている方で、他県からの移住者の呼び込みを積極的に考えている。野上さんの提案は、一つ目に、現在積極的に行われている、竹瓦界隈路地裏散歩などの町づくりに参加する機会を作ること。二つ目に、移住者の中で経験のある人を講師として招き、人材を生かした活動をしてもらう。これは、現在行われているオンパク（温泉泊覧会という別府のイベント）の基本的考えになっている。オンパクは現在若い人材が主となっているが、その高齢者版といった形になる。三つ目に、NPOの活動に参加することができること。例として、現在の別府

楠銀天街の現状

楠銀天街の店舗営業比率（計61店舗）



八湯トラストをNPO化し、社会参加することができるようになればよい。四つ目に、現在は自然発生的に出来始めているさまざまな市民活動を地域の働きかけでシステムとしてつくることが必要である。以上の4点が野上さんの提案であった。

岩村立郎・別府大学教授に聞く

次に、元朝日新聞社で記者として勤め、現在別府大学文学部史学科の岩村立郎教授に話を聞いた。岩村教授は、楠銀天街の活用として三つの提案をした。ひとつは、留学生支援センター・補習塾の開設。別府市は温泉だけでなく、留学生もポイントのひとつである。しかし、日本人学生と留学生との交流はいまひとつないというのが現状だ。そこで、人間関係の相談や、日本人の学生に留学生の書いたレポートなどの誤った表現や誤字・脱字をチェックしてもらったり、教師として働いていた定年退職者や外国人を雇用していた定年退職者の方にサポートをお願いできるような日本人と留学生との交流の場を楠銀天街に設けたらという案だ。次に、老若交流会をつくること。若い世代と年輩の方との接点が少なくなっていることから、昔の話を聞いたり、麻雀、囲碁、将棋をする交流会を楠銀天街に設けたらどうなのだろうかという案である。三つ目は、クラシック・コレクションの店を開く。青年期に憧れた品物で当時は手が出せないものが誰しもある。その想いを追いかけて、収入にゆとりができた今、趣味として集める人の需要が高まっている。そこで、年代物のバイクの部品等を修繕して、楠銀天街に店舗を設けてインターネット等で販売してはどうかという案である。外国の例としてクラシック・カー、カメラなど単なるアンティークではない、根強い人気を持った品物は一定の安定した需要があるようだ。あまり知られていないが、初夏の頃に「阿蘇クラシックカー・ラリー」という催しも行われている。コラボレーションも含めて考えられるのではないか。

生きがいとリスク

移住者による起業を考えた場合、野上さんは、現在別府に移住してきている人の傾向として、商売としての儲けを求めているのではなく、生きがい、生活のハリ、ゆとり、といった楽しむことが根底にあるという。岩村教授は、移動手段として自動車、バイク等の必要性、電話加入権の問題など、起業に伴う金銭面でのリスクを心配する。

そこで、リスクの低い起業を計画することが必要となる。自力で起業する場合、最低でも200万円の資金が必要だ。一般的な人の退職金は、数百万円しか出ない上に、子供が独立していない、住宅のローン等が残っているなど、資金面でゆとりがある人は限られている。さらに、起業するに金融機関で借り入れを考えた場合、年齢制限に引っかかりお金を借りることができないようだ。そこで、1,000万円程度の退職金をもらえる人でないと現実、資金繰りが難しい。また、別府の人口規模では店が客層を選ぶことができず、最低でも40万人の人口規模がないと、客層にあわせた雰囲気の保持が難しくなる。このように、現在の一般的な状況・環境で会社を興すのは大変かつ困難だ。こうしたことも考慮しなければならない。

移住者の手でまちづくり

そこで私たちのグループはいろいろなことを考えたが、まず、移住者の手で理想の街を創造することを提案したい。人間はひとりひとりがそれぞれの理想を持っている。野上さんが言うように、移住希望者は利益重視ではなく生き甲斐を見つけるため、また理想の生活環境を求めて移住という選択をするだろう。移住者はどの様な町に住みたいのか、自分なりのイメージを反映させることができ、地域の不便であるところを改善し、大切なものを残していける町づくりをしていくことが大切だ。与えてもらうのを待つのではなく、自らが別府の町を創っていくのだ。

こうしたことは単なる理想ではなく、兵庫県小野市で行われようとしている。これは兵庫県が行っている政策で、専門家を呼んでの検討会やシンポジウムの実施、民間事業者51団体との事業化に向けた諸課題についての検討会、地元住民や移住希望者へのアンケートの実施やワークショップの開催など、他にもさまざまな活動を行っている。ワークショップでは、小野長寿の郷（仮称）構想の事業予定地を実際に見てもらい、参加者とともに、小野長寿の郷での暮らしについて考える。地元住民と移住希望者との交流も図れるような工夫もしてあり、別府の町づくりにもつながるものが

感じられる。

桃源郷計画

次に大胆かつ奇抜な案を提示したい。題して、桃源郷計画だ。熟年者による「愛の劇場」を盛大に開催する。イベントを通して、全国の移住希望者に「南地区・桃源郷計画」をアピールする。この企画は全国の独身老人を対象にした所謂「集団お見合い」を基本とした催しだ。この催しの最大の目的は、老後を共に過ごすべき伴侶を見つけることである。まず、全国から集まった独身老人の方々に対面式を行ってもらう。次に、参加者全員で別府の混浴温泉に入浴する。入浴の後は宴会で、参加者は、席なども自由に移動し、自分好みの人と好きなように過ごす。宴会が終わると、いよいよ告白タイム。ここで、自分が老後を共に過ごしたいと思う人に告白をしていただき、告白が受け入れられたら、こちらで用意させて頂いた新居で、二人仲良く楽しい老後を過ごして頂く。ちなみに新居の場所は南地区になる。

楠銀天街の活用・参加型の店舗

次に、交流の拠点地として楠銀天街の空き店舗の利用を提案したい。空き店舗を効率よく利用し、比較的リスクが少ない形で起業を興せるよう環境を整え、移住者・地元住民による参加型の店舗を提供する。参加型にすることにより、短い期間だけお店を出したい方などの需要に対して柔軟な対応ができる。

次に参加型の店舗に加えて、生涯学習の場を提案したい。社会の成熟化に伴い、幅広い年齢の方々に生涯学習の需要が近年高まっている。生涯学習とは、一人ひとりが自由に、自らがテーマを選び、自分にあった手段・方法をとりながら生涯にわたって必要なことを、必要なときに学ぶというものだ。現在の生涯学習は問題点として、民間事業者による生涯学習講座がリスト化がされていないので利用しにくい事と、利用者のプライバシー保護や教材費の基準がない事が挙げられる。そこで、それら問題点を抑えるものとして、楠銀天街を生涯学習タウンとして活性化できないかという案だ。楠銀天街を生涯学習の拠点地とするメリットは一カ所に生涯学習の場を集めることで、利用者が利用しやすく、また、講師を移住者の方や地元の方が行い、共に学び、共に教えられる、地域に密着した交流の拠点地として活性できることである。

次に楠銀天街を拠点地とした、訪問相談組合を提案したい。訪問相談組合は、移住してきた方、退職した人、社会人のボランティアを主体とし、また既存の商店や店舗も参加できる形として組合を立ち上げる。事業例として美容室、電気店、生協、薬店、造園業などが考えられる。例えば、切れた電球の交換、リモコンや時計の切れた電池の交換などだ。こうした小さなことは大型量販店ではしてくれず、若い人にすればなんでもなくできることが高齢者には負担となり、危険を伴う。美容サービスでは、介護を必要とし体が思うように動かない方の家に出向きヘアカットをする。生協では、一般利用者向けの生活用品配達に加え、高齢者用に特化した、かゆいところにまで手が届くサービスをおこなう。ボランティアの方は、お正月のしめ飾りを高齢者の代わりに取り付ける事などを行う。高齢化になり、高齢者はますます増えていく。また、それに伴い一人暮らしの老人の数が多くなり、生活の中で、いろいろな不便・障害となることが出てきる。自分の出来ることを周りに対して行い、自分の出来ないことを周りの人に支えてもらう。人間関係を通しての支え合いがこの「訪問相談組合」の意義である。

V 指導教官として

発表に対するコメント

今年も前期授業では、中心市街地で毎月第2第4日曜日に市民が行っている路地裏散歩に参加し、また、そのほかのさまざまな行事に主体的に

参加することを学生に義務付けた。大半の学生は、別府の外から来ているが、別府という社会の実態に触れることになる。ただ、面白いことに、別府で生まれ育った学生がこれまでまったく知らなかったふるさとの一面を知り驚いている。これは、よく言われるように、今日の人間関係が地域社会でいかに希薄になっているかを物語っている。地域社会での実体験が少なければ、いくら学問的に学んでも理解に限界がある。そのためにも、導入として、地域社会をシンプルに体験することを義務付けているわけである。

後期授業では、いくつかのテーマに別れ、グループ研究をすることが課題になる。今年は、上記4テーマであった。その報告を見ると、まず、第1グループでは、アンケート調査をし、南地区に住む高齢者の実情や考えを知ることが出来たとしても、そこからの分析や問題意識の深化があまり見られていない。数字の背後にある現実生活ともっと向き合ってほしかった。

「福祉から見た南地区」でも、アイデアの羅列で、実現するための考察は全く欠いている。地域で生活するためには、交通問題の解決やさまざまな複合的サービスを用意しなければ独居老人や介護が必要な高齢者は悲惨なことになる。同様の問題は、住環境整備のグループにも言える。担当学生が総括しているように、先進事例の紹介にとどまり、南地区でどのように現実性を持つのかは全く述べられていない。ユニバーサルデザインのまちづくりは、日本でも取り組まれているので、そのような例にも言及してほしかった。

最後の「移住による起業の可能性」も、これまで「起業」について全く考えたことがなかったせいか、具体的イメージを描くことに苦労したようである。何度も現地に出かけ、人に意見を聞き、自分なりの考えをまとめようとグループ内でも議論したが、結果は、以上のようにまとまりのないものになってしまった。本学科は福祉などを目指す人間が多く学んでいるが、これがきっかけとなり、ビジネス的視点も持つような学生になってほしいと考えている。

生活全体に対する感性を育てる

ただ、こうした稚拙な調査・研究でも教育的効果ははっきりとある。大学4年間の専門教育を受ける導入として、生活の実態に触れ、総合的視点を常に持つようにすることが大切である。実社会である地域構想を考える時、こうした総合的感性やビジョンがあまりにも欠けている場合が多い。「中心市街地の活性化は、商業活性化であるから商工課が担当する」では問題の解決から程遠い。商業センターという視点にこだわり続けるのでは、郊外に広がる大規模なショッピングセンターには勝てないだろう。つまり、中心市街地を考える時、地域全体での意味づけを問う“総合性”こそが重要である。中心市街地は鉄道やバスなど公共交通の便が良い、何よりも、歴史的な積み重ねがあり、人間の生活を和ませてくれるなど、その特色はさまざまである。こうした総合的視点を持つことが地方自治の特色であることを考えると、一面的見方ではあまりにも本来の趣旨から逸脱している。そのため、1年生の教育として、多少非現実的だとの批判を受けても、夢のあるビジョン、しかも、生活世界全体を総合するビジョンを描くように学生を指導している。決して、“専門性”の影に安住するような人間には育てたくないと思っているからである。

授業自体がまちづくり

中心市街地に取り組んで3年になる。対象の学生は主に毎年入学する1年生であり、参加する学生は毎年変わっている。しかし、テーマの連続性は何とか作りたいと心がけてきた。というのは、社会は単に研究・調査の対象としてあるのではなく、こうした調査、教育活動自体が、まちづくりの一環でなければならないと考えるからである。論文を書くために社会と関わるのであれば、それがいかに優れたものであったとしても、本末転倒している。研究は社会をよりよくするための手段なのだから。町の人々も毎年同じ質問をされればいやになるだろう。しかし、研究のため、教育という名の社会利用はよくある。これでは地域との関係は続かないと考えている。

そのためには、町の中で課題とされていることを町の人々の視線で感じ、その中でテーマを考えることが必要である。授業を設計する私自身が町の仲間でなければならない。従って、授業自体は、学生が町の中に入って行き、研究テーマに沿い、調査、検討をするが、私はその背後でネットワー

ク作りに励む。これも結構時間のかかる仕事である。私の場合かなりの部分楽しんでいるが、地域に生きるとはそういうことではないだろうか。3年間で私も中心市街地に多くの友達を持つことが出来た。

3年間の調査から見えてくること：中心市街地の2つの中心

最後にこの3年間の取り組みから見えてくる別府の中心市街地活性化について一言。既に述べたように、中心市街地の活性化は、商業の活性化だけではもう限界だろう。従って、中心市街地を利便性の高い生活空間と位置づけるべきである。交通の便が良いこと、歴史的風情が残っていることを考えると、郊外に広がった住宅地では得られないアメニティがある。住んで楽しい町の復活が時代ニーズにあっている。私が長年暮らしたドイツでも、市街地の商店は1階部分のみで、2階から4、5階までは一般住宅として利用されている。そのため、日常生活品を取り扱う店は常に客でいっぱいになり、それが生き生きとした町光景を作り出している。

別府の場合、駅前通りから流川通りにかけて、竹瓦温泉を中心に駅前高等温泉、海門寺公園など歴史的な風情を持つ観光、商業、飲食・歓楽エリアが展開されている。今、路地裏散歩に代表される新しい観光の魅力が高まり、メディアでも良く取り上げられ、別府のシンボルになりつつある。野上さんたちのまちづくりグループは、温泉文化ミュージアムとして特区申請をしているが、温泉町、港町として都会的アメニティなどが集積するこの地域は、この特色をもっと磨いていけば、住居地域としても新しい魅力を持つようになることだろう。

次に、流川通りから朝見川までのゾーン、つまり、南地区は、高齢者の理想郷として位置づけ、福祉の充実した住宅ゾーンを整備することが大切だ。都会から高齢者が移住し、かつ、元気なうちは社会参加の機会が多様に準備されている地域づくりである。別府になかった新しい力を外からの人は運んでくれるだろう。また、隣接する駅前ゾーンも住む上での魅力になる。ただし、この地域自体、歴史的エリアであるので、高層のマンション建設はいただけない。あくまでも低層で歴史的コンセプトにマッチする住宅が望まれる。もちろん、ユニバーサルデザインの住宅、道路整備等が必要である。

しかし、高齢者の理想郷と言っても、高齢者のみが住むようになれば、それは理想郷ではない。人は老若混在して初めて楽しい空間が出来るのである。そのため、必ず、保育所、幼稚園等も併設し、混在化のための仕掛けも準備すべきである。2つのコンセプトとが融合するエリアを全国に発信すれば、魅力的な中心市街地が形成されるのではないか。キーワードは、“住んで楽しい街”である。